

第40話（22頁） お百姓と馬

荷馬車のたずなを引いたお百姓が、川にさしかかりました。川にはわたし船がありました。お百姓は馬をはずして、荷車をわたし船にのせました。ところが、馬はごうじょうをはって、わたし船にのろうとしません。お百姓は力いっぱい馬をわたし船に引っばりました。それから、こんどは馬をうしろからおしてみました。岸から動かすことができません。そこで、しっぽを水とは反対のほうに引っばってみたらどうだろう、と思いつきました。馬はごうじょうを張って、引っばれるのとは反対のほうに行ったので、わたし船にのりこんでしまいました。

「お百姓の方が馬よりも機転がきいたというか、頭がよかったというか、そういう話だね。」
「イソップ寓話の『北風と太陽』と、どこか通じる気がしたよ。お百姓も太陽ほどではないけど、最後には一計を案じ、方針を変えてみた。」

「押しでもだめなら引いてみな、ということかな。」

「イソップ寓話といえば、WEBで探したら、似たような話に『ロバとロバ引き』というのがあった。こっちは、ロバが、しっぽを引っ張って制しようとしたロバ引きの農夫を振り切って前へ進み、案の定、谷間に落ちてしまう。強情な生き物はわが道をいこうとするものだ、と解説が付いている。」

「岩波文庫（中務哲郎訳）だと『驢馬と驢馬追い』（186話）の題で出てくる。争いを好む人に、この話はぴったりだ、だってさ。」

「アーズブカの話と直接のつながりはないけど、こういうイソップ寓話も当然、トルストイの頭の中にはあったんだろうね。」

「だいたい動物って、こっちの意図と反対に動く。本能なのかな。それに、川の中って、そもそも嫌いだろうし。」

「お百姓はわたし船にもう乗っていた。そして、岸边から動こうとしない馬の手綱を引っ張ったのかな？」

「状況はもう一つ、はっきりしないけど、この川もずいぶん広くて、わたし船も大きいんじゃないか。日本の川とはスケールが違うはずだよ。」

「だったら、馬が川に怖気づいたのもうなずけるね。」

「生徒はみんな近くの農民の子どもだから、馬はとても身近な動物だ。」

「馬の尻尾は持つな、すぐ蹴られちゃうから、なんて父親から言われていたりして…」

「トルストイ先生、馬の尻尾は怖くて持てないよ、と誰かが言ったかな？」

「前から引っ張る、お尻を押す、尻尾を引っ張る。いつものことだが、三つの動作が描かれ、リズム感がある。足を踏ん張った馬の様子が目の前に浮かんでくるようだ。」

「この話は分かりやすいし、特段の注釈は子どもに対しても要らないね。」